

輸入感染症治療への薬剤師の課題

小谷 宙

慶應義塾大学病院 薬剤部



近年のグローバル化に伴い、我が国においてもデング熱やジカ熱の発症者が確認されるなど、輸入感染症が話題となっている。2014年に西アフリカで大流行し1万名以上が犠牲となったエボラ出血熱などの1類感染症も、もはや対岸の火事ではない。輸入感染症患者を受け入れる医療機関は、必ずしも渡航者医療センターや国際診療科を持つ特定の施設とは限らず、全ての医療機関はこれらの感染症を念頭に置いた診療体制を整える事が重要である。特に輸入感染症の治療薬は、国内未承認薬や通常は流通していない薬剤も多く、これらの薬物療法を行う際には、チーム医療において薬剤師が果たす役割は大きい。

薬剤師には、国内未承認薬の使用に際し、事前に治験審査委員会へ提出する使用申請書の作成や、未承認薬の流通・保管の確認が求められる。また、薬剤管理指導を通じて未承認薬の治療効果・副作用の発現をモニタリングすること、更には患者だけでなく、治療を担当する医師や看護師への情報提供も薬剤師に求められる重要な役割である。

輸入感染症“治療薬”の使用に際しては、一般の医療機関の薬剤師であっても多岐に亘る知識が求められる。一方で、一般薬剤師の輸入感染症に対する知識は十分とはいえない。我々が行った薬剤師の渡航医学に対する意識調査では、輸入感染症の疑いがある患者の診療に携わった経験のある薬剤師のうち、4割以上は診療に携わることに不安があると回答した。また、国内未承認薬の薬剤管理に対しても7割に近い薬剤師は不安があると回答した。この背景として、情報が少ないことや知識が不足していることを挙げる薬剤師が多かった。

輸入感染症に対する対応力を持つ薬剤師を育成することは、グローバル化する現代社会において必要と考えられる。本シンポジウムでは意識調査の結果を中心に、今後、輸入感染症および国内未承認薬に対する薬剤師の対応力を向上させていくための課題について報告する。

略歴：平成13年3月 昭和大学薬学部 卒業

平成15年3月 昭和大学薬学部 大学院修士課程修了。同年4月 慶應義塾大学病院薬剤部に入局

平成21年12月 慶應義塾大学医学部感染制御センター HIV感染症専任薬剤師 兼務

現在に至る。

所属学会：日本病院薬剤師会、日本医療薬学会、東京都病院薬剤師会、日本エイズ学会、日本渡航医学学会

認定：日本病院薬剤師会認定 HIV感染症薬物療法認定薬剤師